

現在語り活動における昔話伝承について

―「月の夜ざらし」を例に―

原田 遼

一 はじめに

本論放では口承文芸における資料のうち、非常に稀有な昔話「月の夜ざらし」(ATU三六五・大成本格新話型七)を例に昔話の伝承動態について着目する。

私は、都会で顕在化した語り手である新潟県三条市下田出身の中野ミツさん八十歳の語りを約四年間、月一回のペースで聴いて来た。その間、山形県真室川町では無文字の語り手の昔話を聴いた。中野ミツさんが彼らとは違うという実感を持った。ミツさんは語りを聞いた幼児体験をもつ伝承の語り手であるが、新しい語りを積極的に取り入れる都会の語り手、でもある。ミツさんの語りの中で、特に私が注目したのは本論放で取り上げる「月の夜ざらし」である。

この話は、採集例が極めて少なく、『日本昔話名彙』『日本昔話通観』には、収載すらしていない。

私が親交のある、東京都江戸川区で活動を行う、聴き耳の会に参加する語り手たちは、この話を好んで語る人が多く、また語らなくとも、その存在を知っている人が多いことに驚かされた。

市場に流通し、語り手たちが底本としている出版物の代表的なものをタイトルのみではあるが紹介する。

- ・鈴木棠三編『日本昔話記録5 新潟県佐渡昔話集』「月の夜ざらし」
- ・津谷タズ子／文 西山三郎／画『月の光でさらさらしゃい』「月の光でさらさらしゃい」
- ・怪談レストラン編集委員会・責任編集 松谷みよ子『殺人レストラン』「白いマフラー」
- ・藤田浩子の語りを聞く会編『かたれ やまんば―藤田浩子の語り―第二集』「月の夜ざらし」

・野村純一／監修 國學院大學栃木短期大学口承文芸セミナー／編『ふるさとお話の旅』② 栃木 短大生が聴いたむかしむ

かし」渡辺澄子「月の夜晒」

・松谷みよ子『読んであげたいおはなし(下)——松谷みよ子の民話「月の夜ざらし」

・野村敬子編聴き耳の会協力

『江戸川で聴いた中野ミツさんの昔語り——現代昔話継承の試み』「60 月のよざらし」

等である。

この「月の夜ざらし」という現代の都会の語り手たちの市場にのる昔話の動態を探ることにより、この昔話の受容・伝播の状況、即ち「昔話伝承」の「現在」を考察する。

二 新潟・佐渡探訪

私は、二〇一三年の六月に新潟県長岡・佐渡で調査を行った。そこで第七回新潟民話語り長岡大会に参加した。それは、新潟県民話語りグループ連絡協議会が主催する大規模なもので、参加者のほとんどは、語り活動しているの方たちであった。そこで、長岡大会実行委員会の許可を得て、参加者に手渡しで無記名のアンケートを十一グループ六十七人に実施した。質問事項に「月のよざらしを語るか・語る人は何を参考にしたか・なぜ語るのか、語らないのか」という項目を用意した。ここでは、語る人の人数のみをグループごとと載せる。

	グループ名	語る人	語らない人	語らない人の内知らなかった人
1	新潟民話の語り部の会	1 (10番と両所属)	9	2
2	かしわざき語り部の会	0	12	8
3	魚沼昔話の会	4	5	1
4	佐渡民話の会	1	2	0
5	栃尾ろばたの会	1	4	0
6	見附昔話の会ほだあかり	1	5	2
7	安塚おはなしの会	0	4	0
8	長岡民話の会	4	3	0
9	三条語りの会とびら	0	0	0
10	新発田いろりの会	1 (1番と両所属)	4	0
11	その他のグループ	1	4	1
12	無記入	0	1	0
	合計	14	53	14

「月の夜ざらし」を語る人は十四人であり回答者の約二割であった。2番の「かしわざき語り部の会」の方たちには「はい・いいえ」の答えしか設置していなかったにもかかわらず親切に知らないと書いてくれた方たちが沢山いた。また、私に本当に、これは新潟県の話なのかと確認してくださる方もあった。地元の話にこだわっているこのグループの方は、この話を話す方と関わってこなかったと考えられる。このことから新潟県における伝承は希薄であると認識せざるをえない。

佐渡で探訪を行った理由は、この話が佐渡の話として紹介されているからである。それは昭和十年三元社から出版された雑誌「昔話研究 第四号」のものである。そこには、報告者を長谷川玉江とし、「猿智入」・「狐の恩返し」・「月のよざらし」・「むじなの仇討ち」・「チクチクばかま」

が掲載されている。「むじなの仇討ち」以外は文章語で表現されている。その後、鈴木棠三編『佐渡昔話集』に附録として転載された。現在、佐渡民話の会（小木民話の会）¹⁾には、出版された「月のよざらし」を書承で語る方がいる。

『佐渡昔話集』の附録には、ほかにも何人かの報告者の名前が上がっている。その中に天澤担さんがいる。その方は小木民話の会の語り手の社会の先生だったということで、紹介に預り、お話を伺うことができた。

天澤担さんは大正八年のお生まれで、草刈神社の家の方である。また、國學院大學国史科四九期生であり、予科の頃鈴木棠三に頼まれて昔話を書き留めたとのことである。附録には國學院大學方言研究会に所属していると書いてあったが、そんなものには、入っていないとおっしゃっていた。

この方の祖母は羽茂の人で、小さい頃良く「寝物語」として昔話を語ってくれたそうである。

そこで、「月の夜ざらし」の拡大コピーを天澤担さんに見せ、一緒に行ってくれた佐渡の語り手が声に出して語って下さり、このような話を知らないかと尋ねたが知らないとおっしゃった。この方の記憶は極めて明瞭で、当時歌われていたと言う「国大小唄」を語んじてくださった。

佐渡で「月のよざらし」が全く確認できなかったわけでもない。それは、國學院大學民俗文学研究会の「傳承文藝 第十八號——南佐渡羽茂・赤泊昔話集——」のなかに一例だけ確認するこ

とができた。この一話は昭和五十八年に國學院大學の富樫晃が羽茂市大崎在住 中川ウメさん（明治二十九年 上山田出身）から採話したものがあるが、どの「月のよざらし」よりも短く構成されており、不可変部分を凝縮しような資料である。残念ながら存命ではあらず、小木民話の会の人もその方の名前は知っていたが話を聞いたことはなかったそうである。

それにしても、ここまで地元根付いていない話は、どのような人物によつて報告されたのであろうか。

三 「昔話研究 第四号」 佐渡昔話 報告者長谷川玉江 について

報告者長谷川玉江に関しては野村純一編の『柳田國男未採択昔話聚稿』に六話の昔話を取り上げられているが、註解ノートには解説が無い。それは編者である野村純一が調べられなかったと配偶者（野村敬子）から教えられた。野村敬子は「関敬吾先生の思い出——折口さん・柳田先生のこと——」（女性と経験 第三十九号）のなかで「野村は「月の夜ざらし」の際立つ文芸性に反応していた（中略）筆跡に成人男性を感じて長谷川玉江もペンネームかと追跡を中断した経験もある」とある。

長谷川玉江は本名であった。しかしその親兄弟は、いわゆる知識人と言われる人物ばかりである。

父・清は、東京大学でイギリスの法律を学び、犬養毅の勧め

めを受けて函館新聞をはじめ。

母・ゆきは、歌人であり、その生家・父親は佐渡では有名で葛西周禎という方で医者と塾を営んでいた。また津田塾生であった。

兄弟の中で最も著名なのは、長男。本名・長谷川海太郎、ペンネームを林不忘・牧逸馬・谷譲次と三つ持つ売れっ子作家である。代表作は林不忘での『丹下左膳』である。

次男、隣二郎は、洋画家で代表作は『猫』。また地味井平造名義で小説も執筆している。

三男の澄はロシア文学者で作家であった、ネフスキーが帰国した年に大阪外国語学校露語科に入学している。

四男の四郎も長男と同様作家である。四郎の作品が、今までどのように伝承されていたか明らかにされなかった「月のよざらし」の素性について答えをもたらした。

それは、昭和三十年三月岩波書店の雑誌「世界」第百十一号に掲載された『阿久正の話』である。この作品は第三十三回芥川賞の候補作品である。ただし、審査員からの評価は芳しくなかったようで、この回の受賞作品は、遠藤周作の『白い人』であった。

この『阿久正の話』の主人公である阿久正が、祖母さんから聴いた話として「月のよざらし」を話を日曜日にあつまつた子供に向けて話している。この話は、長谷川玉江の報告した話とほとんど同じであり、描写の違いは、魔法使いという西洋的な表現⁽²⁾、そして麻のはっきりとした介在⁽³⁾である。

昭和五十一年の『長谷川四郎全集 第三巻』の海坊主の歌

作者のノート・3には

海坊主のお話を子供の時母親が聞かしてくれた。このお話は母親が一回こっきり話されたもので、その後、いかなる本でも読んだことがないし、いかなる人の口からも聞いたことがない。母親はどこからこのお話を仕入れてきたのだろうか。

(中略)

本巻に入っている「阿久正の話」には(月の夜ざらし)と
いうのがでてくるが、これも母親が一回こっきり話して聞
かせたもので、その後、いかなる本でも読んだことがない
し、いかなる人の口からも聞いたことがない。

と作者自身が母親から聴いたと明記されている。

「昔話研究」での報告者の長谷川玉江もほかの話ではあるが、「ノタ山」は母親が祖母から聴いたとなっているので、長谷川家の伝承経路は主に母親のゆき又は由紀子さん(表記に揺れがある)であったと思われる。

長谷川玉江は、「月の夜ざらし」に出てくる女に超自然の力を与えている存在を「村はずれに住んでいる占いをする婆さん⁽⁴⁾」としているが、四郎は「魔法使いのおばあさん」と称している。これは、作品にする際のインパクトを狙ったものかもしれない。しかし外遊歴のある兄弟もおり、自身も満州やシベリアでの生活や妻はクリスチャンであり、長谷川家は函館で生活していた。

また長男の海太郎は英語が堪能で学校を中退してアメリカに、次男も満州へ行っておりそれらの事情を考えると、外国の影響があつたと考えられなくもない。

四 海外伝承との比較

「月の夜ざらし」について比較・分析をした研究者は関敬吾である。関敬吾は、昭和五十二年の『日本の昔話—比較研究序説—』のなかで、

第二章 昔話分類の諸形式

1 分類一般

(4) トムスンの分類 I 複合昔話 ② 超自然的敵 B 吸血鬼と幽霊——「月の夜晒」(AT365)

とATナンバーをつけ「月のよざらし」を例に挙げている。

また、昭和五十四年の『日本昔話大成』の中では、本格新話型七と大成番号をあたえている。「月の夜ざらし」の注では、

この昔話はまだ一例しかしらない。ヨーロッパではレオノレともいい、伝説・昔話として広く分布している。それによると、婚約者は戦争から帰らず、娘は気をもんでいる。するとある日、婚約者が馬でやって来て娘を乗せて行く。

「月はこうこうとささえている。死者は全速力で馬を走らせる。かよわいいとしの女はこわくないか」と唱える。馬を墓場に入り入れる。死者は婚約者とともに開かれた墓の中に入るともいう。

この種の伝説は、わが国にもある。たとえば、船が沖に出ていると同じような船がきてあか取りをかしてくれという。そのときは桶の底を打ち抜いてかさなると船を沈められるという。死者が生者を道づれにしようという信仰と関係するかもしれない。Peucker, W.-E. 1955, Leonore, FFC 158.

と、紹介している。

レオノレとは『The Types of International Folktales A classification and Bibliography Part 1 ANIMAL TALES, TALES OF MAGIC, RELIGIOUS TALES, and REALISTIC TALES, with an INTRODUCTION FFC248』の「ATU365 The Dead Bridegroom Carries off His Bride(Leonore)」である。

その例として、「世界の伝説 5 教会寺院」飯豊道男「死人の騎手」や菅原邦城『世界民間文芸叢書 アイスランドの昔話「ミルカウの教会執事」をあげられる。

「死人の騎手」はオーストリアの話、「ミルカウの教会執事」はアイスランドの話ではあるが、関が指摘した通りこの話は東欧から西欧に広く分布しており、

・ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーのバラード『レノーレ』
・ヨハン・ダヴィット・シューベルトの絵画「レノーレと恋人
ヴィリアムとの騎行」

・ラフ (Raff Joseph Joachim) の交響曲第五番ホ長調「レノーレ」
・ペーターベンの唯一のオペラ作品の「フィデリオ」初演時は
「レオノーレ」

と広く受け入れられてきた題材である。

しかし、これらを読んでいくと、これは、女が死者である男から助かる話であり、「月の夜ざらし」は女が男を死者にする話である。一見共通点はないように感じられる。だが俯瞰して見ると「月の夜ざらし」と「レオノーレ」との共通点が確認できる。

①男女の仲 ②月の表現 ③死者 ④「レオノーレ」では一部であるが、布の存在である。

以上の四点から関敬吾は、「月の夜ざらし」をAT三六五に組み入れたと私は考える。

現在語り手達に語られる「月のよざらし」では布の材料は麻系統と山繭系統に大きく分かれ、綿系統の話は見受けられない。また注目すべき資料に、芭蕉布系統の徳之島の「月晒し着ん」の伝説がある。しかも、重要な要素の歌謡が酷似している。

月晒し着んぐわ 着せられてからや
神が押すままに 行くがしぬき

(月晒し着んをきせられてからは、自分の意のままに歩くこともできず、着物に乗り移った神の押すままになってかないことだ)⁽⁵⁾

話の流れから言って、麻の方が自然であると考えられる。それは長谷川四郎の『阿久正の話』にはつきり書かれているが、夫にさせる布は死者に着せる帷子であると考えられるからである。⁽⁶⁾

一方「レオノーレ」タイプの話には不完全な状態で着用する衣服が出てくるものがいくつみられる。「ミルカウの教会執事」の片袖だけ通したマントや「死人の騎手」のひもの付かない前掛け⁽⁸⁾である。これらは、完全な状態での衣服の着用が死へ直結していることを示唆している。

また、「死人の騎手」では超自然の力を授けるものとして、女である聖母マリアが、「ミルカウの教会執事」では魔法使い⁽¹⁰⁾が出てくる。

このように、関敬吾はかつて日本に一例しかない昔話「つきのよざらし」と海外の伝承の「レオノーレ」は対照的ではあるが、類似点も多いことから報告の呼び水として話型登録したと推測することができる。

しかし、「昔話新種の研究」において、「むしろわれわれの伝承とは意味が逆になっている」と、関自身が認める通り、AT三六五への分類は、再考する必要があると考えられる。

五 都市の語り手と文字による伝承

関敬吾は「昔話と社会環境」のなかで「昔話の中心テーマは幸福になることである」「幸福とは結婚とその生活を支えるための富を得ることである」と論じている。この昔話の中心テーマからはずれた昔話「月のよざらし」は移入昔話である可能性を考える必要性がある。

初期報告者である長谷川は、文字を自在に扱う家庭環境にあった。家庭内・地域伝承の可能性はあるが、「昔話研究」に報告されたものは文体が整いすぎており、文学者を輩出した家庭内における影響が考えられる。

現在の語り手に影響を与えている津谷タズ子『月の光でさらさっしやい』のあとがきのなかに「父や母から聞いた昔話を、記憶をたどりながら子どもに話して聞かせたことが、昔話を研究するきっかけになりました」とある。この話を父親が知っていたとするのならば、そこには戦争の影響も考えられる。昭和十七年七月柳田國男編 鈴木棠三『全国昔話記録 佐渡島昔話集』について野村敬子「関敬吾先生の思い出」の中に「柳田國男の発案で軍隊の慰問袋に『全国昔話記録』が入られることになって六〇〇〇部の発行がなされていた」とある。それを読んだり、耳にしたりして覚えた何人かが語った可能性があるからだ。山田貢『思出夜話あったとさ』「昭和十年―十二年 越後タイムス」の例

からも、昔話が戦争により書承された実態が確認できる。

都市の語り手である中野ミツさんは、自らの管理する昔話として、古い昔話と新しい昔話とを区別しない。彼女はラフカディオ・ハーン「幽霊滝の伝説」や、グリム童話「みつけどり」から翻案されたと考えられる「木の又太郎と木の葉姫」を語る。これらは、母親が葉売りから聞いたり、学校の学芸会で聞いたりしたものである。

「月の夜ざらし」は女子青年団（新制中学がまだ施行されていない時代に裁縫等の実習を行ったという）時代に先輩から聞いたというが、野村敬子編聞き耳の会協力「江戸川で聴いた中野ミツさんの昔語り―現代昔話継承の試み」の中で、「どこで覚えたか、もしかして女子青年団の娘たちが集まったところで、誰かが怖い話したのかもかもしれません。記憶がないのですが、おぼえています。」と答え、伝承についての記憶は確かではない。

中野ミツさんの他にも、中川ヤエ子さん、渡部百子さん、間中一代さん、中野奈美子さん、中川キヨエさん、現代の語り手たちの表現には口承特有の「変化許容部分」¹⁾の変化に乏しいという特有の現象がある。『日本昔話大成』の代表話の伝承地とされる新潟県佐渡においては現在の伝承が希薄な「月のよざらし」が、都市の語り手にはよく知られている。

こうした状況の原因として、語る女性が自分自身を投影することができない「月のよざらし」の高い文芸性を指摘できる。同時に昔話が従来扱わなかった夫と妻の生と死・自己中心主義的世界を

語りだしていることも確認しておこう。中川ヤエ子さんは、従来の昔話には見られない大人の心情が表現されているので好んで語るのだという。逆に、栃木語り部の会の中間一代さんは婿を迎えた立場からこの話を語ることを積極的にはしないという。

長谷川四郎の『阿久正の話』の一章の最終部分のやりとりと重ねて考えてみれば、そこに夫と妻が個人として向き合う現代に生きる語り手たちの心を読み取ることができるだろう。

自己表現を最大の目的とする、昔話の語り活動が観察できるように思う。個人に重きを置く現代社会に表出する昔話の伝承動態である。

今後は、「月の夜ざらし」という名称おける「月」について、また、松山光秀の著作などでみられるような南西諸島における民俗的事象や海流移動する人々の口承史についても考察したい。

注

(1) 翻字参考資料 月の夜ざらし

探訪日時 平成二十五年六月十二日十五時二十五分頃から

小木民話の会 中野奈美子 昭和四十四年生

昔、庄屋のむすぶちに娘が一人居ったと。隣村の庄屋素性の良い婿さんをもらうたんだと。

ところが、どうした塩梅かしばらくすると娘は婿さんの顔を見るのも嫌になってしもうたんだと。親たちは困って

しもうて、納戸の隅の長持の影でひっそり迷いそめんようになっておったと。

ある日のこと、娘は村はずれの古い婆さんの所に行つて言つた。

「誠に恥ずかしい話だけでも、亭主の顔を見るのが嫌で嫌でなかなあ。なんとかならんもんだかも」

したら、古い婆さんは、白髪頭をもちやもじゃさせて、暫くしんなり目を瞑り何やら口の中でむにやむにや唱えておつただけも、やがてギロリと目を向くと娘に言つたと、

「月の良い晩機を織り、月の良い晩それを晒し、月の良いばんそれを縫い、その着物を亭主に着せてみ」

娘は、これを聴くと喜んでいそいそと家（ウチ）へ帰つていったと。そうして占いばあさんの言われたとおりに、月夜の晩を選んで、機を織つて、月夜の晩こっそり布を晒し、月夜の晩とうとうその着物縫い上げた。それは、白く透き通るような着物だったと。青い月夜の晩、娘はその着物をそつと亭主に着せた。したら、亭主はしょんぼりとして暫く月を眺めておつただけも、やがてふらつと煙のように、どこかに消えていってしもうたんだと。

月が傾いて夜が明けたと、それでも亭主は戻ってこなかった。さすがの娘も薄気味悪くなつて、あの村はずれの古い婆さん所へ行つて相談した。したら古い婆さんは、

「ああ、そんなら月夜の晩の丑三つ時に村外れの六道の

辻に立つとつてみんさ」

と、言うたと。娘は言われたとおりに、月夜の晩、村外れの六道の辻へ行つて立つとつたんだと。やがて丑三つ時になると青白い月の光の中を、何やら向こうから白いものが、フワァリ、フワァリと泳ぐように近づいてきたと。それは、あの月の夜さらしを着た亭主だった。亭主は、フワァリ、フワァリと娘に近づいてくると、うらめしそうに娘を見て、「月の夜さらし知らなくて、今は夜神の供をする」と、すすり泣く様に囁くとフワァリ、フワァリと闇の中に消えていつてもうたんだと。

(2) 「阿久正の話」

とうとう或る日、おばさんは近所の魔法使いのおばあさんのところへ行つて、どうしたらおじさんがいなくなつてしまふだろうか、その方法をおしえて下さい、とたのみました。それはわけないことだよ、と魔法使いのおばあさんがいました。

(3) 「阿久正の話」

満月の夜に麻を刈つて、それを満月の夜に水にさらし、満月の夜にそれがかたびらを織つて、満月の夜に、うしろからそーつと、おじさんに着せてごらん、

(4) 「月の夜さらし」

と言つても理由なしに追い出すことも出来ず毎日々々悩んでいた。或日のこと、女は村はずれに住んでゐる占ひをするおばあさんの所を訪れて、(中略)

ばあさんが云ふには、「お前さん、それは、お安い御用ですよ、わたしが良いことを教えて上げませう、(略)」
親切に教へてくれた。

(5) 松山光秀『「ニュー・フォークロア双書29」 徳之島の民俗

1 シマのころろ』平成十六年 未来社

(6) 注(3)に同じ。

(7) 「ミルカウの教会執事」

そのとき彼女は、マントを着ること以外はすっかり身支度ができていた。そこでグヴズルンはマントをとつて片袖を通したが、別の袖は肩にひっかけて落とさないうようにつかんでいた。(中略)

そこには墓が開いているのが見えて、彼女は大変こわくなつたがそれでも、ようやく「教会の」鐘のつなをつかんだ。そのとたん、後から彼女はつかまえられた。グヴズルンが袖の片方しか通す暇がなかったというのは運がよかつた。というのは、彼女が腕を通して袖の肩の縫い目でマントが千切れたくらい強くつかまえられるのだから。

(8) 「死人の騎手」

あるとき、喪中の娘が父の家の前のベンチに座つて、青い前掛けを縫っていた。ちょうど彼女が前掛けのひもを付けようとしているところへ、不意に美しい女性が目の前に現れて言った。

「ひもはそのままにして、縫うのはおよし！ 今夜十二時

に亡くなったおまえの好きな人が、おまえを迎えに来ます。そしたらほもの付かない前掛けを取って、落ちないように、スカートにはさみなさい！」（中略）

前掛けを身につけ、上の端をスカートに深く入れた。（中略）騎手は馬から飛び降り、娘を引きずり降ろした。それから彼はある墓の中に降りて行き、恋人もいっしょに引っぱって行こうとした。

ところがかれが彼女の前掛けをつかむと、それがスカートからはずれた。それで彼は前掛けだけ自分のところ引きおろして、その布をすたすたに引きちぎった。

(9) 「死人の騎手」

その夜、娘のまくら元に美しい女が現れて言った。

「わかりましたか、わたしの言うとおりにしたのがおまえの幸運だったのです。よく聞きなさい、だれかが亡くなっても、二度とあんなに泣くもんじゃありません！おまえの好きな人は昇天できなかつたのです」

そう言ったあとで、彼女はじつは自分は聖母マリアなので、と身を明かして消えた。

(10) 「ミルカウの教会執事」

こうして、西のスカークガイヨルドから魔法使いが呼んでこられた。魔法使いはやつてくると、前畑の上手にある一つの大きな石を掘り起こさせて、寝間の切妻壁のところまで運ばせた。夕方に暗くなると、執事がやってきて家の中

に入ろうとしたが、魔法使いは、執事を切妻壁の南に追いつめ、強い厄払いの呪文をとなえて土のなかに追い返し、その上に石を転がした。

(11) 野村純一『新・桃太郎の誕生』

(12) 「阿久正の話」

年かさの女の子が、なにかいわないのは悪いとも思つたせいもあるだろう、彼のお話がおわるのを待って、いわば儀礼的にこういった。

——おばさんはおじさんがきらいなの？

阿久正はすでにごろりと横たわっていた。彼はそのままの姿勢で、ハハハと笑った。それから

——おい、きみ、と彼は台所の方へ向つて呼びかけたが、ここでは先刻から彼の細君が洗濯をやっていたのである。

——きみはぼくがきらいかって、さ。

すると、水のじゃぶじゃぶという音と一しよに細君の声がきこえてきた。

——きらいでもなさそうだよ。

——好きなそうだよ、と彼はとりついで。

——そうらしいわね、と女の子がいった。

(中略)

で、そのなかで、こんどは台所の方から細君のこえが聞こえてきた。さっきのつづきである。

——でも、あんたは月の夜ざらしを着せてもらいたいん

でしょ、おあいにくさま。

彼は声のする方をふりむいた、その様子はほとんどぎくりとしたようにみえた。

——ばかな、と彼はまじめくさってこういったが、すぐ冗談くさくつけくわえた。

——消えるときは自分で工夫して消えるさ。

(中略)

——いや、わかりやしないぞ、いつなんどき、うしろからこつそりと、だれかにかぶせられて、いなくなるか、わかりやしないぞ。

細君にはきこえなかつた。どうやら阿久正の意識のなかには、突如として抹殺されることへの恐怖が、漠然と巢食っているようである。

文献一覧

- アナトール・ル・ブラース編 後平濤子訳『プルターニユの伝承』平成二十一年 藤原書店
- 荒井秀直訳『ベートーベン フィテリオ』平成二十四年 音楽之友社
- 飯豊道男『世界の伝説 5 教会寺院』昭和五十四年 ぎょうせい
- 小沢信男『捨身なひと』平成二十五年 晶文社
- 怪談レストラン編集委員会・責任編集 松谷みよ子『殺人レストラン』平成二十年 童心社

國學院大學民俗文学研究会「傳承文藝第十八號—南佐渡羽茂・

赤泊昔話集—」平成五年

佐々木徳夫／文 阿部笙子／絵 田村文子／CD朗読『みやぎ

の昔ばなし 心をぬくめる21話』平成十九年 仙台文学館

佐渡郡赤泊村教育会『赤泊村史』昭和二十一年 赤泊村教育会

菅原邦城『世界民間文芸叢書 アイスランドの昔話』昭和

五十四年 三弥井書店

鈴木棠三編『佐渡昔話集 佐渡民間傳承叢書 第二輯』昭和十四

年 民間傳承の會

鈴木棠三編『日本昔話記録5 新潟県佐渡昔話集』昭和四十八

年 三省堂

関敬吾『昔話と社会環境』初出昭和二十九年・『関敬吾著作集1

昔話の社会性』昭和五十五年 同朋舎

関敬吾『昔話新種の研究』初出昭和五十一年・『関敬吾著作集3

昔話研究法と伝説』昭和五十六年 同朋舎

関敬吾『日本の昔話—比較研究序説』昭和五十二年・『関敬吾

著作集6 比較研究序説』昭和五十七年 同朋舎

関敬吾『日本昔話大成第七卷』昭和五十四年 角川書店

津谷タズ子／文 西山三郎／画『月の光でさらさっしゅい』昭和

六十年 童心社

東京子ども図書館編『おはなしろろそく19』平成四年 東京子

ども図書館

野村敬子編『聴き耳の会協力』江戸川で聴いた中野ミツさんの昔

語り―現代昔話継承の試み』平成二十四年 瑞木書房

野村敬子「関敬吾先生の思い出」石井正己／研究代表者『国際化時代を視野に入れた説話と教科書に関する歴史的研究 平成二十五年広域科学教科教育学研究経費報告書』平成二十六年

年 東京学芸大学

野村敬子「関敬吾先生の思い出―折口さん・柳田先生のこと―」『女性と経験 第三十九号』平成二十六年

野村純一「新・桃太郎の誕生―日本の「桃ノ子太郎」たち―」平成十二年 吉川弘文館

野村純一編『柳田國男未採撰昔話聚稿』平成十四年 瑞木書房
野村純一／監修 國學院大學栃木短期大学口承文芸セミナー／

編『ふるさとお話の旅 ② 栃木 短大生が聴いたむかしむかし』平成十七年 星の環会

長谷川四郎『ぼくの伯父さん』昭和四十六年 青土社
長谷川四郎「阿久正の話」初出「世界」第百一十一号 昭和三十

年・『長谷川四郎全集 第三卷』昭和五十一年 晶文社
長谷川四郎・吉田秀和・大江健三郎・野村修 他著『ぼくのシベ

リヤの伯父さん』昭和五十六年 晶文社
長谷川四郎『文学的回想』昭和五十八年 晶文社

長谷川玉江「月のよびやし」『昔話研究 第四号』昭和十年
浜口一夫編『佐渡の民話』昭和三十五年 未来社

羽茂町史編さん委員会『通史編 近世の羽茂 羽茂町誌第三卷』平成五年 羽茂町

羽茂町史編さん委員会『佐渡 羽茂の民間信仰Ⅱ堂と講・野の

石仏Ⅱ 羽茂町誌別冊』平成九年 羽茂町教育委員会

羽茂町史編さん委員会『通史編 近世の羽茂 羽茂町誌第四卷』平成十年 羽茂町

藤田浩子の語りを聞く会 編集／発行『かたれ やまんば―藤田浩子の語り―第二集』平成十七年

ヘンリー・グラッシー編 大澤正佳・大澤薫訳『アイスランドの民話』平成五年 青土社

牧田利平編『越佐人物誌 上巻』昭和四十七年 野島出版
松谷みよ子『読んであげたいおはなし(下)―松谷みよ子の民話』平成二十三年 筑摩書房

松山光秀『「ニュー・フォークロア双書29」徳之島の民俗 1 シマのころ』平成十六年 未来社

松山光秀『徳之島の民俗文化』平成二十一年 南方新社
柳田國男編 鈴木棠三『全国昔話記録 佐渡島昔話集』昭和

十七年 三省堂
山田貢『思出の夜話 あったとさ』昭和十七年 越後タイムス

山本修之助編『佐渡叢書 第三卷』昭和四十一年 佐渡叢書刊行会
山本修之助編『佐渡の百年』昭和四十七年 佐渡の百年刊行会

HANS-JORG UTHER『The Types of International Folktales A classification and Bibliography Part 1 ANIMAL TALES, TALES OF

MAGIC, RELIGIOUS TALES, and REALISTIC TALES, with an INTRODUCTION FFC248』2004 Yammala

(はらだ・りょう／國學院大學大学院)